

ボクらの夏休み

奄美市立小宿小学校 五年 新田 紗紀

「ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン……」
「こつやって、電車に揺られていると、去年の夏休みを思い出す……。ねえ、電車が着くまでの間だけど、あの日のことを聞いてくれる？ 去年の夏休みも、ボクは、こつやって、電車に揺られていた……」

「じゃ、行って来るね、母さん。十日たったら、迎えにきてね。」
「うん。分かった。行ってらっしゃい。」

そうやってボクは、田舎のおじいちゃんの家遊びに行っただ。ホームに着くと、おじいちゃんが、迎えに来てくれた。

「なんもないとこじゃが、だだっ広くて、いいところじゃろ？」
「うん！」

おじいちゃんの家は、本当に空気が美味しくて、クワガタやカブトムシだって、たくさんいた。

「さわさわさわさわ……」

風の音が、さわやかだ。川だって、とってもきれいだ。

おじいちゃんの家に着てから、何日かたった頃、ボクはすっかりこの田舎が大好きになっていた。

「じゃあ、ちょっと遊びに行ってくるねー！」
「おう、気をつけてなあ。」

どこにあの森があるとか、あの店があるとか、だいたい分かるようになった。明日にはもう、帰っちゃうから、その日、ボクはお気に入りの場所に出かけた。途中、駄菓子屋で、ラムネを買った。あと、アイスキャンデーも買った。溶けないように、木陰を歩きながら、川沿いに進んだ。そこには、小さな木のベンチがあるんだ。大きな松の木で陰になってるし、人もあんまり通らないから、ベンチでゆったりできる。

「カララン」

ボクは、ラムネを一口のんだ。川が、キラキラ光ってる。

「こついう所で飲むラムネは、すごく美味しく感じるなあ。」

「そうだなあ。」

「へっ？」

「……！いつの間にか？ボクの隣に座ってたなんて！気づかなかった。その子は、アイスキャンデーをペるペるなめている。」

「あっ！それ、ボクのアイスキャンディーじゃないか！袋から勝手にとるなんて！」

「あっ、わりいな、でも、『溶けかけてたぜ。』」

だって？

なんて生意気な野郎だ！初めて会った人のものを勝手に食べると、『溶けかけてたぜ。』」

だって？

ボクがその子をじーっとにらむと、その子は、悪びれた様子もなく、

「はは悪かったって。そんなに怒るな。しょうがねえなあ……。
ん、ほらこれ、特別にお前にやるよ。だから怒るなよ。」
そいつは、ズボンのポケットから、ドングリを一つ、取り出し
て、ボクに差し出した。

「なに……、これ。」

「ドングリだよ、みりやあ分かるだろ。今夜、迎えに行つてやる
から。待つとけよー！じゃなー！」

「えっ？！迎えに行くつてどこへ？！ねえ、どついつことだよー！」
もうその時には、風と一緒に、あいつの姿はなくなっていた。

ボクが帰ったのは、日が沈んで、すっかり暗くなった時だった。

「おっ、一、遅かったなあ。なにしようたか。」

「うん、ちよっと川沿いのベンチに行つてたんだ。」
すると、じいちゃんは、目を丸くした。

「お前、川沿いに行ったのか！あそこはな、よう、やんちゃぎつ
ねがでる所なんじゃ！大丈夫だったか？」

「えっ？うん。大丈夫。」

「そうか、じゃあ、じいちゃん、風呂にはいつてくるから、一、
明日の帰る準備しとけよ。」飯もあるからな。」

「うん、分かった。」

おじいちゃんがお風呂に入ったのを確かめると、ボクは、そ
っとドングリを取り出した。きつねか……。まさかねえ。
その時だ。

「ぎあーっ」

と、強い風が吹いた。おじいちゃんは、いつも戸を閉めておく
から。

「うっ、目にゴミが入っちゃった。」

しばしばする目を開けると、そこには……

「ようー！」

「ああっ！お前は、アイスキャンディーの！」

そう、そこには、浴衣姿の、あの男の子がいた。

「祭りつて言つたらうっもつ始まつちゃつ。早くー！」

ぐいっ、とボクを引っ張るとその男の子は、ふわっと宙に浮いた。

「さあーっ」

と耳元で風がうなっている。どんどん家々が小さくなっていく。

「風乗りつていうんだぜ。このごろ、やつとできるようになった
んだ。」

「へえー……つておい！なにすんだよ！おじいちゃん！」

「静かに！もうじき着く。それよりお前、ドングリ、持つてきて
るな？」

そういえば……ぎゅっとなかで握りしめていた。

「おい、ボクをどこに連れて行くんだよ！祭りつて何？ドングリ
がそうしたの？」

「あっ、そうか、お前あの祭り知らないのか？あんな、お前がよ
く来る川沿いのベンチに、松の木があるだろ？あれ、大天狗様
の住家なんだ。毎年、大天狗様の住家のまわりで、祭りがある

んだぜ。その祭りに参加するには、そのドングリが必要なんだ。そんな大事なものをアイスクャンディーと引き替えにお前に渡したんじゃないか。ふだん、人間は参加できないんだぜ。」

「・・・お前は、参加できるの?」

「ああ。」

「?」っていつことは、こいつは人間じゃない?風乗りとかしてるし・・・。じゃあなんなんだ?もしかして、おじいちゃんが言っていたきつね?えっ?うそだろ?えっ?色々考えると、そいつはワクワクした声で、

「ほら、着いた!もうはじまつちやてるぞお。ほら早く!」

と言ってボクをぐんぐん引つ張っていく。途中、小さなきつねにびくびくしながらドングリを渡した。そしてにぎやかな方へ目をやると・・・

「わーっ!」

ちようちんをぶら下げて、きつね達が輪になって踊っている。赤や青のはっぴをつけて、「よっこいしょ!どっこいっしょ!満月の夜だ!よっこいしょ!どっこいしょ!よっこいしょ!」

なんて歌ってる。ボクはおかしくておかしくて思わず笑ってしまった。すると、そのきつね達は「うち列びいたひしへく!」あっ!!「コン吉!やっとなたか。ところで、その隣の人間はだれだい?ドングリは持ってきてるのかい?」

「ああ。それより、俺も輪に入れてくれよ!こいつもいいだろ?祭りなんだからさ!」

そういつてボクは、意味も分からぬまま、輪になって踊った。

「よっこいしょ!どっこいっしょ!満月の夜だ!よっこいしょ!きつねの・・・」

「ねえ。お前の名前、コン吉っていつの?」

きつね達の輪を離れて、きつね団子を一人で食べながらボクが聞くと、そいつは、最後の一個を口に入れて、もぐもぐさせながら言った。

「ああ。そつだよ、きつねのなかで、一人だけ、人間の姿になれるから、特別に、大天狗様から名前をもらつたんだ。」

「それってすごいことなの?」

「ああ!もちろん。それよりお前の名前は?」

「うん。おじいちゃんがつけてくれたんだ。」

「ふうん・・・。あつ!俺、甘酒買おうかな。」

お祭りは夜遅くまで続きそつだ。アイスクャンディーの代わりに「ここに来れたんなら、まあ、許してやるよ、コン吉。」

ボクがごろんと草原に寝ころぶと、コン吉が甘酒をもって帰ってきた。

「もつすぐ、きつねの鬼火が始まるぞ。空を見とけ。」

「うおお」

と燃え上がる炎が、空でいろんな形になっていく。きれいだな。

「あつ、そつえば!コン吉、ボク、もつ帰らなきゃ。」

するとコン吉は、寂しそうな顔をした。

「もつちよつといられないのかい?」

「ああ……ごめん。明日帰っちゃっしょ。」

「そっか、じゃ、家まで送ってくよ。」

ボクは、コン吉と風に乗って、おじいちゃんの家に着いた。おじいちゃんも、心配そつに庭をうるちよろしていた。

「ただいま、心配かけてごめん、おじいちゃん。」

するとおじいちゃんは目をうるませながら

「おう、心配しとったんぞ。まったくこんな夜遅くまで……。」

「いや、ここにいる、コン吉と……。」

ボクが振り返ってみると、

「あれ？」

誰もいなかった。

「まあ、いい。さあ、早く寝よう。電車は朝早いから。」

「ううん。」

コン吉は、風と一緒になくなったのだろうか。

地面には、一つのドングリが転がっていた。

信じてくれる？この話。アイスキャンディーのおかげであの祭りに行けたんだ。今でも、あのドングリ持ってるよ。もしかしたらまた、あの祭りに行けるかもしれないし……。あつと、ホームに着いた。おじいちゃんがまた迎えに来てる。じゃ、ボクはここでおりるね。良かったら君もおいでよ！大歓迎さ！もし来るなら……ドングリを忘れずにね！